

第1章 ラトヴィア語の動詞接頭辞の概略

本章では、ラトヴィア語の動詞接頭辞について概略する。アスペクト論や語形成論の立場から分類される接頭辞の3つの意味を概略するとともに、動詞接頭辞にはどのような研究や記述のアプローチがあったのかを整理する。

1.1. 接頭辞付加

語幹の前に位置する接辞、つまり接頭辞は名詞、形容詞、副詞、動詞に付加される。このプロセスを接頭辞付加という。動詞に付加される接頭辞は、「動詞接頭辞」として区別されることがある。

類型論的には接頭辞の存在しない言語もある。また接頭辞が存在する言語でも、接頭辞が果たす役割は様々である。しかし一般に接頭辞は空間的意味を持ち、付加される動詞が示す動作の方向づけを行うほか、様々な意味を加える。言語によっては、その中にアスペクトの意味があることも一般に知られている (Lazard 1995, 23)。

ロシア語の動詞接頭辞を研究する Krongauz は動詞接頭辞の研究を「接頭辞学 (prefiksologija)」と引用符つきで呼び、アスペクト論と語形成論が融合した記述方法が接頭辞研究の主流であるとしている (Krongauz 1998, 56-57)。

本論文でも、アスペクト論と語形成論からのアプローチを基本としている。

1.2. ラトヴィア語の動詞接頭辞

接頭辞はラトヴィア語で *priedēklis* 「前に付くもの」と呼ばれ、名詞、形容詞、副詞、動詞に付加される形態素である。一般に接頭辞は、空間的意味を示す前置詞起源とされる。動詞の接頭辞は11⁹あり、このうち7つの接頭辞は前置詞としても存在する¹⁰。

『現代ラトヴィア標準語文法 (Mūsdienu latviešu literārās valodas gramatika)』¹¹ (以下『標準語文法』) では、語形成論における形態素として接頭辞が記述されている (『標準語文法』1959, 344-370)。アスペクトカテゴリーの項目においても、各接頭辞の意味、その意味とアスペクト対立との関係が記述されている (『標準語文法』1959, 565-575)。

『標準語文法』の「接頭辞による動詞派生」で記されている動詞接頭辞とその空間的意味を、表 1-1 にまとめて示す (『標準語文法』1959, 367-368)。

⁹ 高地方言では接頭辞 *da-* 「最後まで…する」があるが、本論文では考察の対象としない。

¹⁰ 接頭辞 *iz-* に対応し、起点を示す前置詞 *iz* は、ここでは前置詞の数に含んでいない。この前置詞は高地方言で用いられ、標準語では *stāsts iz dzīves* 「本当にあった話」のように特定の表現にのみ用いられることが多い。

¹¹ 2巻からなるアカデミー文法で、1959年(音声論と形態論)と1961年(統語論)に発刊された。今日まで改訂はされていない。2012年現在、新しいアカデミー文法が編纂中である。

表 1-1 : 動詞接頭辞とその空間的意味

aiz-	「離」 ¹² 「去」	aizbēgt 「逃げ去る」	bēgt 「逃げる」
	「閉」	aizbāzt 「栓をする」	bāzt 「突っ込む」
	「後」	aizslēpties 「後ろへ隠れる」	slēpties 「隠れる」
前置詞 aiz	aiz galda 「机の後ろに」		
ap-	「周」	apiet 「迂回する」	iet 「行く」
前置詞 ap	ap galdu 「机の周りに」		
at-	「離」	atņemt 「奪う」	ņemt 「取る」
	「遠」	atstumt 「押しやる」	stumt 「押す」
	「開」	atslēgt 「鍵を開ける」	slēgt 「閉じる」
	「戻」	atskatīties 「振り返る」	skatīties 「見る」
	「来」	atnest 「持ってくる」	nest 「運ぶ」
ie-	「中」	ieiet 「入る」	iet 「行く」
iz-	「外」	izskriet 「走り出る」	skriet 「走る」
	「通」	izskriet 「走り抜ける」	skriet 「走る」
	「散」	izbārstīt 「撒き散らす」	bārstīt 「撒く」
no-	「下」	nobraukt 「(乗り物で) 下る」	braukt 「(乗り物で) 行く」
	「離」	noņemt 「取り除く」	ņemt 「取る」
前置詞 no	no galda 「机から」		
pa-	「下」	pabēgt 「下へ逃げ込む」	bēgt 「逃げる」
	「過」	paskriet 「走り過ぎる」	skriet 「走る」
前置詞 pa	pa galdu 「机に沿って」		
pie-	「接」「付」	pieskriet 「走り寄る」	skriet 「走る」
前置詞 pie	pie galda 「机のもとで」		
pār-	「超」	pārbraukt 「(乗り物で) 超える」	braukt 「(乗り物で) 行く」
	「家」	pārbraukt 「(乗り物で) 帰宅する」	braukt 「(乗り物で) 行く」
前置詞 pār	pār galdu 「机を超えて」		
sa-	「集」	sanākt 「集まって来る」	nākt 「来る」
	「共」	salīmēt 「貼り合わせる」	līmēt 「貼る」
uz-	「上」	uziet 「上る」	iet 「行く」
前置詞 uz	uz galda 「机の上に」(属格支配) uz galdu 「机へ(方向)」(対格支配)		

¹² 『標準語文法』を始めとするラトヴィア語の動詞接頭辞の空間的意味の記述では、空間的意味を副詞で表すのが一般的である。しかし本論文では便宜上、漢字により空間的意味を示している。

接頭辞は名詞、形容詞、副詞にも付加される。例えば接頭辞 *pa-* は名詞に付加され、「下にあるもの」(*saule* 「太陽」: *pasaule* 「世界 (=太陽の下にあるもの)」、*logs* 「窓」: *palodze* 「窓台 (=窓の下にあるもの)」) や、類似したもの (*māte* 「母」: *pamāte* 「継母」、*miers* 「平和」: *pamiers* 「休戦」) を示す。

形容詞と副詞に付加されると、特性を強調する (*dārgs* 「(値段が) 高い」: *padārgs* 「結構高い」、*dārgi* 「高く」: *padārgi* 「結構高く」)。

これら他の品詞への接頭辞付加に比べ、動詞への接頭辞付加における意味修正はより複雑である。また接頭辞がどのような意味を基動詞に与えるのかは、基動詞の語彙的意味が大きく関係している。

接頭辞が空間的意味を示すのは、動詞が移動などの物理的動作を示す場合である (*skriet* 「走る」: *paskriet* 「下に走り込む」、*bēgt* 「逃げる」: *pabēgt* 「下に逃げ込む」)。活動や発話に関係する動詞には、動作時間の短さや少なさの意味を加える (*lasīt* 「読む」: *palasīt* 「少し読む」、*skriet* 「走る」: *paskriet* 「少し走る」)。

また接頭辞は IPFV と PFV のアスペクト対立を示すこともある (*rādīt* 「見せる (IPFV)」: *parādīt* 「見せる (PFV)」、*ņemt* 「取る (IPFV)」: *paņemt* 「取る (PFV)」)。アスペクト対立と接頭辞の関わりについては、1.3.3. で詳しく述べる。

1.3. 動詞接頭辞の3つの主な意味の分類

『標準語文法』の語形成やアスペクトの記述、Staltmane によるラトヴィア語のアスペクト研究において、動詞接頭辞の意味は大きく3つの意味に分けられる (『標準語文法』1959, Staltmane 1958d)。それは空間的意味、量・時間的意味、そして形式的意味である。

1.3.1. 空間的意味

空間的意味は接頭辞の元来の意味である。*iet* 「(歩いて) 行く」、*braukt* 「(乗り物で) 行く」、*nākt* 「来る」、*skriet* 「走る」などの運動を示す動詞や、*likt* 「置く」といった物理的動作を示す動詞と結びつくと、動作の方向や目標地点を明確にする。

各接頭辞の具体的な空間的意味は、すでに1.2.の表1-1で示した。

空間的意味は、次に説明する量・時間的意味や形式的意味といったアスペクトに関わる意味へと転義する。

1.3.2. 量・時間的意味

量・時間的意味 (*kvantatīvi-temporālā nozīme*) は、基動詞の示す動作の主体や客体の量を特定したり、動作の継続時間の長短、突然性、集中性の高低、動作の開始の意味である。

量・時間的意味は、接頭辞と再帰要素がセットになって示されることもある。

以下にいくつかの量・時間的意味とその例を示す。カッコには基動詞を示した。

動作の開始・突然性	aizdegt 「燃え始める」	(degt 「燃えている」)
動作の少ない量や低い集中性	palasīt 「少し読む」	(lasīt 「読む」)
動作の多い量や高い集中性	izlasīties 「思う存分読む」	
動作の過度性	pārlasīties 「読みすぎる」	
動作の一定時間の継続	palasīt 「(短い時間) 読書する」	nolasīt 「(長い時間) 読書する」
主体・客体の多さ	sanākt 「(大勢が) 来る」	(nākt 「来る」)
	saacināt 「(大勢を) 招待する」	(aicināt 「招待する」)

認知言語学のアプローチでは、接頭辞の量・時間的意味は空間的意味のメタファーとして説明が試みられることがある(早稲田 2011 など)。しかし本論文では詳しく論じない。

1.3.3. 形式的意味

形式的意味 (formālā nozīme) の接頭辞は、IPFV の基動詞の語義を変えずに PFV 化する接頭辞である。この場合 PFV と IPFV の動詞の意味は、アスペクトの対立においてのみ異なる。形式的意味の接頭辞は、スラヴ語学において“空の接頭辞 (préverbe vide¹³)”と呼ばれたり、アスペクト以外の意味修正を基動詞に加えないことから“純粋な PFV 化の接頭辞 (tīri perfektivējošs priedēklis)”や“純粋なアスペクトの接頭辞 (čistovidovaja pristavka)”と呼ばれる。

接頭辞が“空の接頭辞”とみなされるのは、基動詞が示す動作の最終的な結果が、接頭辞が示す空間的意味に一致する場合である。Schooneveld によれば、動詞に付加される接頭辞が、その動詞の語彙的意味の自然な結果 (outcome) を示すと、動詞を PFV 化するとし、意味的余剰性の好例とされる¹⁴ (Schooneveld 1958,160-161)。

ラトヴィア語では、生産的な形式的意味の接頭辞として sa-, no-, iz-, pa-が挙げられるが (Staltmane 1958d, 58)、各接頭辞は程度の差こそあれ形式的意味の接頭辞として基動詞を

¹³ “空の接頭辞”という呼称は、動詞の意味と一致する空間的意味を持ち、動詞を PFV 化する接頭辞について、Vey がチェコ語を例に最初に用いた用語である。無接頭辞の piše 「彼は書く (IPFV)」を PFV 化する napiše 「彼は書く (PFV)」の接頭辞 na- (空間的意味は「上」) のような“空の接頭辞”に対し、opiše 「彼は書き写す (PFV)」や zapiše 「彼は書き留める (PFV)」の接頭辞 o-や za-のように、動詞を PFV 化し、さらに意味も変える接頭辞を「完全な接頭辞 (préverbe plein)」としている (Vey 1952, 82)。

¹⁴ 動詞と接頭辞の示す空間的意味が一致すると意味的中和が起こる、と解釈されがちだが、Schooneveld によれば、実際には接頭辞は元の空間的意味を残しているとし、意味的中和と捉えることに積極的ではない (Schooneveld 1958, 160-161)。一方で Krongauz は、動詞と接頭辞の示す空間的意味が重複して起こる意味の中和作用を“ゼロ効果”、または Schooneveld の名をとり、「スホーネフェルド効果」と呼んでいる (Krongauz 1998, 121)。

PFV化する。1.2.の表 1-1 で示した空間的意味を参考にしつつ、形式的意味の接頭辞として付加され、基動詞を PFV 化する接頭辞を表 1-2 に示す。

表 1-2：形式的意味の接頭辞

接頭辞とその空間的意味	基動詞 (IPFV)	接頭辞動詞 (PFV)
aiz- 「遮」 ¹⁵	jūgt 「(馬を) 馬車につける」	aizjūgt
at- 「来」	nākt 「来る」	atnākt
ap- 「周」	ēst 「食べる」	apēst
ie- 「中」	dot 「与える」	iedot
iz- 「通」	lasīt 「読む」	izlasīt
no-	pirkt 「買う」	nopirkt
pa-	rādīt 「見せる」	parādīt
pār- 「超」「移」	tulkot 「訳す」	pārtulkot
pie- 「接」	zvanīt 「電話をかける」	piezvanīt
sa- 「集」	vākt 「集める」	savākt
uz- 「上」	rakstīt 「書く」	uzrakstīt

これらの接頭辞動詞には、基動詞の動作が前提とする空間的意味と接頭辞自体の空間的意味の同一性と、接頭辞の空間的意味自体を特定することが難しいものもある。例えば上の表 1-2 では、接頭辞 no-と pa-がある。基動詞 pirkt 「買う (IPFV)」に対する接頭辞動詞 nopirkt 「買う (PFV)」の接頭辞 no-は、前置詞 no と同様に「...から」という起点を示す空間的意味とも解釈でき、“売り手から” 買うという空間的意味が動詞に見いだされるかもしれない。しかしこの接頭辞は本来の空間的意味をとりわけ失いやすく、形式的意味以前の空間的意味を確証を持って特定することが難しい。また形式的意味の接頭辞 pa-も、元の空間的意味の「下」や「沿」を特定しにくい。

1.3.4. 接頭辞の3つの主な意味の相互関係

量・時間的意味も形式的意味も、空間的意味がアスペクトに関わる意味に抽象化したものである。しかしこれら3つの意味は明確な区分が難しい。これには意味の抽象化の程度を特定する難しさと、アスペクトを文法カテゴリーと見なすか、語彙的カテゴリーと見なすかの問題が関わっているからである。

¹⁵ ラトヴィア語の文献で示されている空間的意味の副詞と日本語の空間的意味の表示にはずれがある。例えば、ラトヴィア語による接頭辞 aiz-の説明にはないが、日本語で解釈をすると空間的意味として「遮」や「埋」という意味を見出すことができる。漢字で置き換えるとより細かい空間的意味の分類ができる場合があることから、『標準語文法』で示されている空間的意味は参考程度に示す。

空間的意味と形式的意味

形式的意味は、基動詞が表す動作の空間的意味に一致する空間的意味が結果的に薄まったものである。しかし接頭辞の元々の空間的意味は実際には残っていることが多いことから、形式的意味と空間的意味は連続的で、明確な区別はできない。

空間的意味と量・時間的意味

量・時間的意味も空間的意味が抽象化したものと考えられるが、その境界を明確に定めることは難しい。例えば ieskatīties「覗く」は skatīties「見る」に空間的意味「中」を持つ接頭辞 ie-が付加され、「何かの中を覗く」という意味がある。一方で「見入る」「しっかり見る」という動作の高い集中性もあるため、この場合の接頭辞は、空間的意味も量・時間的意味も持っていると考えられる。

形式的意味と量・時間的意味

ラトヴィア語のアスペクトが文法的なカテゴリーか、語彙的なカテゴリーかは、本論文の2.2.2.で見ると、今日まで議論の余地が残る問題である。なぜなら「動作の完了」である形式的意味を量・時間的意味の一つに含むことで、基動詞を PFV 化する接頭辞の形式的意味を量・時間的意味に含めて解釈することもできるからである。このことから、抽象度の高い（文法的とされる）PFV と IPFV のアスペクト対立の表現に関与する接頭辞の形式的意味と、アスペクト対立に関与しない個別のアスペクト的意味を表現する接頭辞の量・時間的意味の区別も明確ではなくなる。

このように、伝統的な接頭辞の3つの主要な意味の区分は連続的なものである。しかし本論文では、便宜上これら3つの主要な意味の分類を用いることとする。

1.4. 動詞接頭辞の先行研究と記述

本論文では、アスペクト論や語形成論を中心に動詞接頭辞を考察する。ここではラトヴィア語学の動詞接頭辞の先行研究と記述を、言語学と言語文化論に分けて簡単に概略する。

1.4.1. 言語学における先行研究と記述

ラトヴィア語の動詞接頭辞が初めて広く論じられたのは、1903年の Endzelīns による『ラトヴィア語の前置詞 (Latyšskie predlogi)』であった (Endzelīns 1971, 307-654)。この記述は2部構成で、1部では前置詞、2部では前置詞の格支配の問題と動詞接頭辞の意味が記述されている。また、動詞接頭辞の多義性による動詞接頭辞間の類義性、接頭辞動詞とアスペクトの問題が触れられている。

語形成力が高いラトヴィア語であるが、語形成論に関する研究自体は多くない。ラトヴィア語学で最も体系的な語形成論の記述には、Soida のモノグラフ『語形成 (Vārddarināšana)』がある (Soida 2009)。しかし 2.2. で後述するように、Soida はアスペクト対立を成す形式的意味の接頭辞を語形成論では扱わず、空間的意味と量・時間的意味の接頭辞のみを記述している。Soida は派生語を文脈から切り離し、語の派生方法である語形成のモデルを体系的に記述している。

語彙には特定の言語集団によって用いられるものがある。統計的なデータは示されていないが、no-, iz-, at-, ie-, pa-, pie- の接頭辞を持つ新語が若者言葉でよく使用されるといふ指摘が若者言葉の研究においてある (Ernstson & Tidriķe 2006, 37)。接頭辞の用法に方言差があることから、方言の語彙研究においても接頭辞の記述が見られる (Poiša 1998, Bušmane 2000)。

ある接頭辞が付加された動詞の使用が一般的である場面で、慣用的でない別の接頭辞が付加された動詞が使用されるなど、接頭辞動詞の用法の変化や傾向の指摘もある。Okmane はその背景に、聞き手や読み手に対して注意を喚起する側面、他の言語による影響の側面、話者の言語運用能力の不足や注意不足といった側面を挙げている (Okmane 2007, 210)。“予想外”の場面において近年付加されることが多い接頭辞には ie- が挙げられ、接頭辞の新たな意味の広がりや、話者による言葉遊びの側面も指摘されている (Laiveniece 2009)。

アスペクト論からの動詞接頭辞についての分析は、ソ連時代に Staltmane が広く研究をしている。アスペクトについては、本論文の 2.2. で詳しく整理する。

接頭辞、特に動詞に付加される接頭辞の意味は極めて複雑で、どの分野においても接頭辞研究の関心は接頭辞の意味や機能に帰結する。しかしロシア語学などに比べ、ラトヴィア語学では接頭辞の意味を意味論から扱った先行研究 (Rinholm 1985, Hilmane 2000, Kanno 2003 など) の数は少ない。

語の意味の記述を役割とする辞書論では、3 人の研究者の先行研究がある。アスペクト論の立場からは、Staltmane が接頭辞動詞の体系的な辞書記述の方法を模索している (Staltmane 1961)。『標準ラトヴィア語辞典 (Latviešu literārās valodas vārdnīca)』(以下『標準語辞典¹⁶』)の編纂中に書かれたこの論文では、アルファベット順で最初の 2 つの接頭辞 aiz- と ap- を例に、空間的意味が共通する場合、統一された意味記述の方法が提案されているほか、アスペクト対立を成す 2 つの動詞については、同一の見出し語として掲載するか、一方の動詞の意味説明をもう一方の動詞の意味説明に参照させることが提案されている。しかし本論文の 2.4.3. で述べるように、この提案は実行には至らなかった。

Zuicena は辞書論の立場から接頭辞 pie- の意味を広範に記述している (Zuicena 1983)。

Šmidebergs は辞書編纂者の立場として、品詞に限らず接頭辞のついた語をいかに辞書に記述すべきかを論じている。『標準語辞典』のページ数全体の 40% を占める (Šmidebergs 1997,

¹⁶ 1972 年から 1989 年にかけて発刊された計 8 巻の辞典である。本論文では電子版 (<http://www.tezaurs.lv/lv>) を使用した。

162) 接頭辞による派生語の意味記述の重要性を強調する彼は、接頭辞語自体の数が多く、接頭辞語の多義性が原因で接頭辞語の意味記述に時間がかかることなど、当事者ならではの編纂事情を明かしている (Šmidebergs 2000b, 211)。接頭辞動詞に関しては、そもそも PFV 性の意味の研究があまり進んでいないこと、PFV 動詞の意味記述が整理されていないことを指摘していることから (Šmidebergs 2000a, 306)、アスペクト論自体の研究が立ち遅れてきたことが伺われる。

1.4.2. 言語文化論における記述

言語文化論における動詞接頭辞の記述について整理をする。言語文化論では動詞接頭辞(付加)に対して、大きく分けて4つのタイプの批判がある。

- 1) 余剰な PFV 化の接頭辞付加
- 2) 表面的態度を示す接頭辞付加
- 3) 二重接頭辞付加
- 4) 個別の接頭辞動詞の用法

1) の余剰な PFV 化については本論文の問題意識 0.2.2. で簡単に触れたが、各研究者による詳しい議論は 3.5.2. に譲る。大部分の基動詞は借用語であるが、少数ながらラトヴィア語本来の動詞の PFV 化に対する批判もある。

2) では、表面的態度を示す接頭辞 *pa-* や *pie-* などの動作の不完全性や短期性のアスペクトを示す接頭辞動詞が動作に「不真面目な態度のニュアンス」を付け加えるとして、「それが望ましくない場合においては余剰である」とされる (Freimane 1993, 158)。

1) や 2) のような余剰とされる接頭辞付加には、3) の二重接頭辞付加も含まれる。ラトヴィア語の動詞には基本的に一つの接頭辞しか付加されない¹⁷ ため、避けるべきであるとするとされる。例えば、ロシア語からの翻訳借用で派生したとされる動詞(基動詞 *celt* 「上げる」→ *pacelt* 「上げる (PFV)」→ *piepacelt* 「少し上げる」← ロシア語 *pripodnjat'* 「少し上げる」など)は標準語では認められていない (Freimane 1993, 157, Kušķis 2009, 227-228)。

4) では、主に基動詞と接頭辞動詞、接頭辞動詞間の類義性と使い分けが問題となる。例えば、*iegūt* 「取得する」と *apgūt* 「習得する」といった同じ基動詞から派生した接頭辞動詞の意味比較 (Niselovičs 1969) や、*lietot* 「使用する」と *pielietot* 「適用する」といった基動詞と接頭辞動詞の意味比較 (Ceplīte 1971) がある。

個別の接頭辞に関しては、接頭辞 *par-* が付加された派生語 (Šmidebergs 1982)、術語における基動詞と接頭辞動詞の選択 (Skujīņa 1966)、その他の個別の接頭辞動詞の記述 (Ozola

¹⁷ 規範で認められる二重接頭辞の動詞は、前から2番目の接頭辞が語彙化し、基動詞だけでは普通使われない動詞や、接頭辞が基動詞の意味を大きく変えている動詞である。詳しくは本論文 4.6.3.1. を参照されたい。

1966, Rāge 1967 など) がある。互いに類義語であるが、本来期待される接頭辞動詞の代わりに別の接頭辞動詞を使用する傾向があり、それが外国語の影響であるという指摘もされている (Ozola 2008)。

1.5. 第1章のまとめ

動詞接頭辞はこれまでに語形成論、アスペクト論、辞書論、意味論、そして言語文化論で記述されてきた。方言差や若者言葉など社会的側面からの研究もあり、接頭辞への視点は幅広い。そして注目すべきことに、動詞接頭辞は言語の規範と逸脱に関わる言語文化論でも記述されてきた。

動詞接頭辞は空間的意味、量・時間的意味、形式的意味を持つ。動詞接頭辞の空間的意味はメタファーによって、動作の開始や集中性の高低といった個別的なアスペクトを示す量・時間的意味を持つ。形式的意味は基動詞を PFV 化し、アスペクト対立に関与する。この形式的意味は、基動詞の示す動作の結果と接頭辞の示す空間的意味が一致する際に、意味的中和によって空間的意味が薄まった接頭辞が持つ意味である。

しかし接頭辞の 3 つの意味の境界は段階的である。なぜなら量・時間的意味と形式的意味はどちらも空間的意味のメタファーや空間的意味が抽象化された意味であり、連続的につながっている。量・時間的意味と形式的意味の区別は、語彙的に示される個別のアスペクトと、PFV・IPFV という抽象度の高いアスペクト対立の区別でもある。しかしこの区別は、語彙としてのアスペクトと文法としてのアスペクトの区別という、ラトヴィア語のアスペクト論の難しい問題を孕んでいる。

動詞接頭辞はアスペクトと深く関わっている。そのため、ラトヴィア語のアスペクトの詳しい記述のために次章を割くこととする。